



Title	児童・青年期の抑うつ症状，躁症状，および自閉傾向に関する臨床的・疫学的研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	井上, 貴雄
Citation	北海道大学. 博士(保健科学) 甲第11429号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/55306
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Takao_Inoue_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

博士の専攻分野の名称：博士（保健科学）

氏名：井上 貴雄

学位論文題名

児童・青年期の抑うつ症状，躁症状，および自閉傾向に関する臨床的・疫学的研究

【緒言】

近年，児童・青年期の精神科臨床ではうつ病性障害や双極性障害などの気分障害に加え，広汎性発達障害に対する関心が高まっている．精神疾患の国際的な診断基準である DSM-III に代表される操作的診断により，子どもの気分障害が従来考えられていたよりも多く存在することが明らかになってきた．一方，広汎性発達障害においても以前より高い有病率が報告されるようになった．児童・青年期の気分障害と広汎性発達障害はともに近年になってから注目を集めるようになった障害であり，その実態や関連性については未だ不明な点が少なくない．そこで本研究では，一般の児童・青年における抑うつ症状，躁症状，および自閉傾向の実態を明らかにし，それらの症状の関連性について検討することを目的とした．

【対象】

本研究では北海道教育委員会の協力を得て北海道全域の小学校 24 校，中学校 28 校，高等学校 28 校を抽出し，小学 3 年生 650 人，小学 5 年生 711 人，中学 2 年生 847 人，高校 2 年生 1,527 人の計 3,735 人を対象とした．また抑うつ症状については千歳市民 4,258 人（平均年齢 60.5 ± 13.4 ）の結果と比較し，児童・青年期の抑うつ症状について検討を行った．

【方法】

児童・青年の調査では協力を得られた学校に調査票と説明文書を送付し，生徒および保護者に対して，①プライバシーの厳守，②自由意思による参加の決定，③不参加でも不利益が生じないこと，④研究成果の発表の 4 点について説明し，同意を得られた者から調査票の回収を行った．調査票には，簡易抑うつ症状尺度（QIDS-J），躁病エピソード診断スクリーニング質問表（MEDSCI），自閉症スペクトラム指数日本語版（AQ-J）を用いた．

千歳市民の調査では健康診断受診者に QIDS-J の質問紙を送付し，調査への協力が得られた受診者には記載後，健診当日に提出を求めた．

解析には SPSS20.0J を用い，学年ごとの平均値の比較を行うために Games-Howell 法にて多重比較を行った．抑うつ症状，躁症状，および自閉傾向の関連を調べるためにピアソンの積率相関係数を求めた．

【結果】

QIDS-J の平均スコアは小学 3 年生で 3.1 ± 3.2 ，小学 5 年生で 3.6 ± 3.2 ，中学 2 年生で 5.5 ± 4.3 ，高校 2 年生で 6.8 ± 4.4 点であった．多重比較より小<中<高校生と平均スコアが有意に高いことが確認された ($p < 0.01$)．また，各学年で約 3.7~19.4% の生徒が抑うつ群であり，約 2.8~11.1% に自殺念慮が疑われた．同時期に行った一般市民における調査結果では平均スコアは 3.5 ± 3.4 であり，抑うつ群の割合は約 4.6% であり，約 2.4% に自殺念慮が疑われた．各世代の一般市民と比較して中・高校生の平均スコアが高く，抑うつ症状や自殺念慮が疑われる者の割合が高いことが確認された．項目別の平均スコアでは自己評価に関する「自分についての見方」の項目でスコアが高かった．MEDSCI の結果から，小・中・高校生では全体の平均スコ

アは 4.3 ± 4.1 であり、各学年で約 2.6~13.2%の生徒に躁症状が疑われた。AQ-J では全体の平均スコアは 20.4 ± 6.1 であり、小く中く高校生とスコアが有意に高いことが確認された ($p < 0.01$)。また各学年で約 3.0~7.8%の生徒に自閉傾向が疑われ、中・高校生で割合が高かった。AQ-J の平均スコアと同様に下位尺度のコミュニケーションで小く中く高校生と平均スコアが高いことが確認された ($p < 0.05$)。次に、各症状の関連を調べるために QIDS-J と MEDSCI、および AQ-J の各スコア間でピアソンの積率相関係数を求めた。その結果、QIDS-J と MEDSCI において正の相関関係が確認され、児童・青年期では抑うつ傾向のスコアが高ければ躁傾向のスコアも高くなることが確認された (相関係数 0.40, $p < 0.01$)。また、QIDS-J と AQ-J の正の相関関係が確認され、児童・青年期では抑うつ傾向のスコアが高ければ自閉傾向のスコアも高くなることが確認された (相関係数 0.36, $p < 0.01$)。しかし、MEDSCI-AQ-J では意味のある相関関係は認められなかった (相関係数 0.13, $p < 0.01$)。

【考察】

抑うつ症状について、中・高校生では他の年代と比較して抑うつ症状のスコアが高くなり、抑うつ群の割合が増え、自殺念慮が疑われる者の割合も高いことが確認された。この理由として、中・高校生は抑うつや死についての関心が高まる時期であること、自己評価が低く将来や対人関係で不安や悩みが生じやすくなっていることなどが考えられた。また、児童・青年のうつ病性障害が見逃されている可能性が高いのではないかと考えられた。年代別の死因で 10 歳~14 歳では 3 位 (11.3%) が、15 歳~19 歳では 1 位 (31.2%) が自殺となっているとの報告がある。以上より一般の中・高校生では自殺念慮を有する者が一定数存在し、死因として自殺が多いことから、学校や家庭において上記のような認識を持ちながら対応する必要があると考えられる。

自閉傾向について、広汎性発達障害の有病率は約 1%とされているが今回の AQ-J の結果では各学年で約 3.0~7.8%と高い割合で自閉傾向が疑われ、小く中く高校生とスコアが高いことが明らかになった。臨床的には年齢が上がるにつれて自閉傾向は減少するが、自己記入式の評価では自閉傾向に関する自己意識を問うことになり、小学生に比べて中・高校生の方が自身の自閉傾向を認識しやすくなっているのではないかと考えられる。また、普通学級において知的発達に遅れはないものの、学習面や行動面で著しい困難を示す児童・生徒の割合は 6.3%であったという報告もあり、今回の調査で自閉傾向が疑われた者と重なる者も含まれるのではないかと考えられた。

各症状の関連について、QIDS-J と MEDSCI および QIDS-J と AQ-J のスコアで正の相関関係が確認された。児童・青年期の気分障害では約 20%~30%の確率でうつ病性障害から双極性障害に発展する、という報告があり、成人と比べてその可能性が高いと考えられる。QIDS-J と MEDSCI の正の相関関係は、児童・青年期のうつ病性障害と双極性障害との関連を示唆するものであると考えられる。また、児童・青年期の広汎性発達障害の comorbidity の研究ではうつ病性障害を 6.0~22.9%の割合で併存することが報告されており、児童・青年期のうつ病性障害の comorbidity の研究では広汎性発達障害を 36.2%の割合で併存していたことが報告されている。今回 QIDS-J と AQ-J で正の相関関係が確認されたことは、児童・青年期ではうつ病性障害と広汎性発達障害が併存しやすいことに対する裏付けになったと考えられる。

【結論】

本研究によって中・高校生で抑うつ傾向が高まり、自殺念慮が疑われる者の割合が高いこと、自閉傾向を認識する者が多いことが確認された。また児童・青年期における抑うつ症状と躁症状、および抑うつ症状と自閉傾向との関連が示唆された。